くまと車掌

木内高音

青空文庫

わたしは尋常科の四年を卒業するまで、北海道におりました。その頃は、尋常科は四年までしかありませんでしたから、わたしは北海道で尋常小学を卒業したわけです。

今から、ざっと二十年前になります。今では小学校の読本は、日本中どこへいっても同じのを使っておりますが、その当時は、北海道用という特別のがあって、わたしたちは、それを習ったものです。茶色の表紙に青いとじ糸を使い、中の紙も日本紙で片面だけに字をすったのを二つ折りにして重ねとじた、純日本式の読本でした。その中には、内地の人の知らない、北海道だけのお話がだいぶのっていたようです。（わたしたちは、本州のことを内地内地と、なつかしがって、よんでいました。）

たとえは、くまが納屋へしのびこんで、かずの子のほしたのをはらいっぱいに食べ、のどがかわいたので川の水をのむと、さあ大へんです。おなかの中で、かずの子が水をすってうんとふえたからたまりません。くまは、とうとう胃がはれつして死んでしまったというようなお話ものっていました。ほしかずの子がどんなに水へつけるとふえるものかは、おかあさま方におきききになればよくわかります。

——わたしは、またもう一つ読本の中にあったくまの絵をありありと思いだすことができます。それは、大きなくまが後足で立って、木の枝にさけをたくさん通したのをかついでいくところです。さけが川へ上ってくるころになりますと、川はさけでいっぱいになり、さけはたがいに身動きもできないくらいになることがあるのだそうです。そういう時をねらって、くまは川の岸にでて、爪にひっかけては、さけをほしいだけ取ります。それから木の枝を折って、さけのあごへ通し、それをかついで穴へ帰ろうとするのですが、さすがのくまもそこまでは気がつかないとみえ、枝のさきをとめておかないものですから、さけは、道々、一つずり落ち二つ落ちして、ようやく穴へ帰ったころには、枝に一ぴきものこっていない。そうしたくまの歩いたあとへ通りかかった人こそしあわせで、くまの落したさけをひろい集めさえすれば大漁になるというお話でした。

こんなふうですから、ふだんでもくまの話は、よく耳にしました。きょうは郵便配達が、くまに出会ってあぶないところだったとか、どこどこへくまがふいにでて、飼い馬をただ一うちになぐり殺したとか、そういった話をたびたびききました。

家の父は、新しく鉄道を敷くために、山の中を測量に歩いていましたので、そのたんびアイヌ人を道案内にたのんでいました。アイヌ人は、そんな縁故から、くまの肉を、よく、わたしの家へ持ってきてくれたものでした。

北海道のくまといえば、こんなにも縁故が深いのです。しかし、かずの子を食べすぎたり、さけを落して歩いたり、猛獣ながら、どことなく、くまにはこっけいな、かわいいところがあるではありませんか。

さて、つぎにわたしがお話ししようと思うのは、北海道にはじめて鉄道ができたころのことで、今からざっと四十年も前になりましょうか。その当時、まだ二十代の青年で、あの石狩平野を走る列車に車掌として乗りこんでいたおじからきいた話なのです。以下、わたしとか自分とかいうのは、おじのことです。

——なにしろ、そのころの鉄道といったら、人の足あとどころか、

北海道名物のからすさえもすがたを見せないような原野を切り開いて通したのだから、そのさびしさといったらなかった。さびしいところではない。すごいといおうか、なんといおうか、いってもいっても、両がわには人間の背よりも高いあしやかやがびっしりと生え茂っているばかりで、人間くさいものなんか一つもありはしない。まったく夕方なんぞ、列車の車掌室から、ひとりぼっちで外をながめていると、泣きたくも泣けないような気もちだった。そういう時には、川のそばへさしかかって、水音をきくだけでもうれしかった。——くまなども、はじめは、汽車を見るとみょうなけものがやってきたぐらいに思ったらしい。機関車の前へのこのこでてきてにげようともしないので、汽笛をピイピイ鳴らしてやっと追いはらったというような話もあった。

さて、わたしが、くまと、列車の中で大格闘をしたという話も、まあ、そんな時分のことなのだ。

秋のことだった。終点のI駅からでる最終列車に後部車掌をつとめることになったわたしは、列車の一ばん後の貨車についた三尺ばかりしかない制動室に乗りこんだ。制動室というのはブレーキがあるからそういうので、車掌室のことだ。自分はそこのかたい腰かけへ腰をおろすと、うす暗いシグナル・ランプをたよりに、かたい鉛筆をなめなめ、日記をつけた。つぎの停車駅までは、約一時間もかかる。全線で一ばん長い丁場だった。日記をつけてしまうと、することもなくなったので、まどから暗い外をすかして見た。黒い立木が、かすかに夜の空にすけて見えて、時々、機関車のはく火の粉が、赤い線をえがいて高く低く飛びさる。風のかげんで、機関のザッザッポッポッという音が、遠くなったり近くなったりする。全線中で一ばん危険な場所になっている急勾配のカーブにさしかかるにはまだだいぶ間があるので、わたしは安心してまた腰をおろすと、いろいろと内地の家のことなどを思いだして、しみじみとした気持になっていた。

——ふと、顔をあげて見ると、貨車との仕切りにはまったガラスまどに、人間の顔がぼんやりとうつっている。わたしは、それが、自分の顔だということは知っていながら、なんだか友だちでもできたようなにぎやかな気持になって、しきりに帽子のひさしを上げたり、さげたり、目をいからしてみたり、口をまげてみたりして、ひとり興がっていた。しまいには、シグナル・ランプを顔の前につきだしてみたりした。（その当時は、客車にさえ、うす暗い魚油灯をつけたもので、車掌室はただ車掌の持つシグナル・ランプで照らされるばかりであった。そのほかに、ろうそくを不時の用意として、いつも持ってはいたが。）で、シグナル・ランプを顔のそばへ持ってきて見ると、自分の顔は、暗いガラスの中に、くっきりとうかびだすようにうつって見えた。

と、自分は、鼻の頭に、煤煙であろう、黒いものがべっとりとついているのを見つけて苦笑した。指のさきにつばをつけて、鼻の頭をこすりながら、わたしは、いままで自分の顔にむけていたランプをくるりむこうへまわすと、ガラスにうつっていた自分の影は消えて、サーチライトのようないなずま形の光が、さっと、ガラスまどを通して、貨車の内部へさしこんだ。その貨車にはちょうど、石狩川でとれたさけがつみこんであったので、自分は、キラキラと銀色に光るうろこの山を予想したのだったが、ランプの光は、ただ、ぼんやりとやみの中にとけこんでしまって、なんにも見えない。おか

しいなと思ったので、自分は、立ち上がってガラスまどに鼻をつけるようにしてのぞきこむと、おどろいた。さけの山は、乱雑にとりくずされ、ふみにじりでもしたように、めちゃめちゃになっているのだ。

さけがぬすまれるということは、その季節にはよくあることなので、自分は、さけどろぼうが貨車の中まであらしたのかと思うと、思わず、むッとして、手荒く仕切りの車戸をひきあけて、足をふみこんだ。もちろん、まだどろぼうが貨車の中にぐずついていようとは思わなかったけれど、用心のために、そばにあった信号旗のまいたのを、右手に持ち、左手にランプを高くさし上げて、用心深く進んだ。

車の動揺のために、ともすると、よろけそうになるのを、じっとふみこらえて、ランプを片すみにさしつけると、大きな大入道のような影法師がうしろの板かべにいっぱいうつった。ぎょっとして、目を見はると、ふいに、すみの方でピカッと光ったものがある。自分は瞬間、ぞおっとして、立ちすくんでしまった。光りものは二つ。ランプの光をうけて、らんらんとかがやき、ぐるぐるとほのおのようにうずまいている。

「くまだ！」

そう気がつくと、自分はかえって、一時落着いたくらいであった。どうしてくまなぞがはいりこんだものか、そんな疑問をいだくよゆうもなく、自分は、ランプを持った手を、ぐいと、くまの方にさしだして、一歩しりぞいて身がまえた。くまは火をおそれる、ということをとっさの間にも、思い出したものとみえる。

「ううううううう……。」

くまもふいをうたれておどろいたらしく、ひくいうなり声をあげながら、じりじりとしりごみをしはじめた。

「このすきに、にげなければ……。」

ふっと気がついて、ランプをさしつけたまま、後ずさりにしりぞきはじめると、そのひょうしに、ひどく車がゆれて、自分は足もとのさけに足をふみすべらして、ドシンと横だおしになげだされてしまった。くまも、それといっしょに、いやっというほど、大きなからだをかべ板にぶつけたらしく、はげしくおこって、いっそうものすごいうなり声をたてた。自分はあわてて、とり落したランプをひろい、立ちなおった。しあわせにもランプは消えなかったが、それといっしょに自分は、列車が例の急勾配にさしかかろうとしているなと感じて、ひやりとした。自分は、ブレーキをまかなければならないのだ。

後ずさりをして、羽目板にぶつかってしまったくまは、のがれ道のないことをさとったものか、すごい形相をし、牙をむきだしてとびかかりそうな身がまえをした。自分はむちゅうでランプをさしつけたまま、後ずさりに戸口へ近づき、旗を持っていた方の手をうしろへまわして戸口をさぐってみると、ぎくっとした。いつの間にか戸はしまっているではないか、いまの列車の動揺のために、ひとりでにしまったのに相違ない。あけようと、あせっても、なにしろ前にくまをひかえて、片手をうしろにまわしての仕事だから困った。くまはいよいよ牙をむきだし、いまにもとびかかろうという気勢を見せている。

「いつものところで、ブレーキをかけることをおこたったら、列車は脱線するかもわからない。けわしい崖の中腹を走っている列車

は、それと同時に数十尺の下に岩をかんでいる激流に、墜落するよりほかはない。」

そう思うと、自分は、もうじっとしていられなかった。おそろしさもわすれて、いきなり、さけをひろい上げると、それをくまの方に投げつけておいて、そのひまに戸をあけようとあせった。

「うわう……。」

ものすごいさけび声が列車の騒音にもまぎれずに、ひびきわたった。ガタピシとひっかかって、戸は動こうともしない。自分はふり返りざま、また、気ちがいのようにランプをふりまわした。くまは、後足で立ち上がったまま赤いランプの光におびえてか、爪をとぐねこのように、バリバリとそばの羽目板に爪をたてた。

一息ついた自分は、とっさに戸の上部のガラスまどをやぶろうと考えた。いきなり、うしろをふりむくと、手にした旗のぼうでガラスをつきくだいた。ガラガラとガラスの破片のとびちる音が気味悪くひびいた。同時にくるいたったくまは一声高くうなると、自分を目がけてとびかかってきた。あぶないところでむきなおった自分は、むちゅうで、横ざまにからだをなげだした。そのひょうしに、シグナル・ランプは、ガチャンとはげしい音をたててこわれてしまった。

なまぐさい、べとべとしたさけの中にはいつくばっている自分の、うしろの方で、くまはううううと、うなっている。さいわいに、くまの爪にはかからなかったが、たった一つののがれ道であるまど口を、くまのために占領されてしまったのである。

列車は、くまと自分とを真暗やみの貨車の中にとじこめたまま、なにも知らずに、どんどんとはしっている。少し速度がゆるんできたようだ。自分は、また、ブレーキのことを思い出して、ぞっとした。

「ううううう。」

くまはきゅうにまた、ものすごいうなり声をたてはじめた。さて、どうしたら、自分は制動室へもどることができるであろうか？

「うわう……。」

と、一声、すさまじいうなり声をあげたと思うと、いきなりとびかかってきたくまの腹の下を、横にくぐりぬけるようにからだをなげだしたので、あぶないところで、自分はくまの爪にかかることだけはのがれることができたのだが、さて、少し気が落着いてくると、おそろしさと不安とが、前の二倍になって自分の胸におしよせてきた。

たった一つののがれ道だと思ったガラスまどは、くまの大きなからだで、すっかりふさがれてしまったのだ。自分とくまは、さっきとはまったく、あべこべになったわけだ。自分はまるでくまのおりへ入れられたようなものだ。

さっきまでは、とにかくにげられそうな希望があった。まどへ両手をかけてさえしまえば、飛越台の要領ででも、どうにか制動室へからだを運ぶことができると思っていた。それがだめだとなると、自分はまったくもう、どうしていいかわからなくなってしまった。自分の命があぶないばかりでなく、車掌として重大な任務をはたすことができない。非常信号機？　――そういうものがあればいいのだが、なにしろ、むかしの開通してまもなくの鉄道なのだから、そういう用意がまるでないのだ。

ともかく、じっとしてはいられないから、そろそろからだをおこしてみた。四つんばいになると、さっき投げだした、シグナル・ラ

ンプのこわれがジャリジャリと手のひらにさわる。なまぐさい魚のにおいにまじって、こぼれた石油がプンと鼻をうつ。——なによりも大事な、たった一つの武器とも思っていたランプが、メチャメチャになってしまったのである。

「自分はなにを持ってくまと戦ったらいいだろうか?」

そう思うと自分はまったく絶望してしまった。——それでも自分は、ガラスのかけらで手を切らないように用心しながら、そろそろとあたりをかき探してみた。なんというあてもない、ただ自分は、むちゅうでそんなことをしていたのだ。

「うわう……。」

くまは、またうなり声をあげた。自分は、ぎょっとして、そちらを見すかしたが、真暗やみの中で、よくは見えないが、くまは戸口に前足をかけたまま、動かずにいるようだ。

自分は、その時、みようなことを考えた。——いや、考えたことがらは、みようでもなんでもないのだが、そんな、せっぱつまった場合に、よくも、あんな、のんきなことを考えだしたものだと、それがみようなのだ。

それは、自分がいままでにきいたくまについての、いろんなめずらしい話なのだ。そんなものが、つぎからつぎへと頭にうかんできた。

……そのうちの一つは、ふいに山の中でくまにでくわした人の話だった。そういう場合に、死んだふりをするということはだれでも知っている。しかし、これは、それにしてもものすごい話だった。——その人は、やはり、どうすることもできず、仕方なしにたおれて息を殺していたのだそうである。くまが、頭のそばへきて、自分をかぎまわしているのが、はっきりとわかる。かれは、まったく死んだようになって、心臓の鼓動までも止めるようにしていた。もっとも、そんな時にはかえって心臓はドキドキとはげしく打ったことだろうが……。じようだんはさておき、二分……三分……そのうちにくまのけはいがしなくなったように思われた。その男は、もういいだろうと思って、かすかにうす目をあいて見たのだそうだ。——その瞬間、ザクンと一打、大きなくまの手が、かれの右の額から頭にかけて打ちおろされた。男は、むちゅうでバネ仕掛のようにとび上がって、あとはどうしたのか自分にはわからない。ともかくその男は助かったそうである。大方、くまもふいをうたれてびっくりしたのだろう。しかし、目をあいて見るまでの時間は、わずか一分か二分だったのだろうが、その男には、どんなに長く感じられたことだろう。——

つい、話が横道にそれた。——しかし、くまといっしょに貨車の中にとじこめられたまま、自分はまったく、そんな、人の話などを思いだしていたのだからみようではないか。

「ごーっ。」

というひびきが、列車全体をつつむようにとどろきわたった。

「鉄橋だ。」

と思うと、自分はもうじっとしていられなかった。川をわたってから約二マイルのところが例の難所なのだ。機関士も、十分に速度を落しはするが、後部のブレーキは、どうしてもまかなければならないことになっている。が、速度のついた列車が、機関車のブレーキ一つで支え切れないとすると、脱線か転覆……か。わずか二、三両ではあるが、混合列車のことなので客車も連結されている。その

乗客たちの運命は、まったく、自分ひとりの腕にあるといっていい。

自分は、足をふみしめて立ち上がった。と、ふいに明かるい光が一すじ、目の前を走って、暗い車内になめの線を落している。

「月だ……月の光だ！」

貨車の横腹にある大きな板戸の、すきまをもれていましがた上がったと思われる月がさしこんできたのであった。自分は、なんというわけもなく勇みたった。月の光をたどって見ると、さけの山にかけられたむしろが二、三枚、足もとに落ちている。

「これだ。」自分は、とっさに思った。「火だ、火だ。」

自分は、あせりにあせって、ポケットのマッチをさがそうとしたところが、どうしても手がポケットにはいらない。もどかしく思って、ぐッと手をおしこもうとすると、ポキリと折れたものがある。見ると、それはろうそくではないか。——さっき、ころんだひょうしにポケットからとびだしたのを、むちゅうで、手さぐりでつかんでいたものとみえる。

二、三本いっしょにマッチをすると、自分はまずそれをろうそくにうつした。——やぶれたガラスまどへ片手をつっこんだまま中腰に立っているくまのすがたが、きゅうに明かるく照らしだされた。にわかに火を見たくまの目は、ギロギロとくるいだしそうに光った。

自分は、むしろに火をつけた。メラメラともえ上がったと思うと、しめり気があるとみえて、すぐに力なく消えそうになる。

くまは、低く長くうなりだした。それは、さっきまでほえたような声とちがって、大敵に出会った場合に、たがいにすきをねらってにらみ合っているような、不気味なものだった。

こっちの火勢がよわければ、今にもとびかかろうかという気配が見えた。

自分は、さっき石油がこぼれたと思うあたりに、足で下に落ちているむしろをおしやり、手に持った一枚のもえかけたむしろを、桶のようにからだの前にかざしながら、足さきで、むしろに石油をしみこませようと、ごしごしと下のむしろをふみつづけた。

くまは、まだうなりながら、自分をにらみすえている。

手に持っているむしろが、消えないうちに、手早く自分は、床のむしろをひろい上げた。

石油がしみたのか、むしろがかわいていたのか、今度は、勢よく一時にパッともえついた。

この機会をはずしてはと、自分は、もう、おそろしさもわすれて——実は、おそろしさのあまりだが——もえ上がるむしろを、ちょうど、スペインの闘牛士が使う赤いハンケチのようにふりながら、じりじりと前進した。

鼻さきでもえる火を見ては、くまもがまんができなかったのだろう。どしんと大きな音をひびかせて、うしろへとびのいた。

それといっしょに、またまどガラスの落ちくだける音がした。くまと自分ははじめと同じ位置にもどったわけだ。すみのかべ板に背中をこすりつけて、立ったくまは、まるでまねきねこみたいなかっこうだった。（あとになってわかったことだが、くまは、ガラスまどに手をつっこんだひょうしに片手にけがをしたので、自然そんな手つきをしたのだ。）

この時、だしぬけに汽笛が、ヒョーと鳴った。下りのカーブにか

かる合図なのだ。

自分でも、よく、それが、耳にはいったと思う。——自分は、なにもかもわすれて、うしろのガラスまどへ上半身をつっこんだ。

しかし、どうしても足がぬけない。死にものぐるいでもがいているうちに、さいわいに、手が、ブレーキのハンドルにかかった。

自分は、宙にぶらさがったままで力をこめてハンドルをまわした。

……それから、あとのことは自分はなにもおぼえていない。

すぐつぎの駅で、自分は腰から下に火傷をして、気絶しているところを助けられた。

ころんだ時に、ズボンのうしろにしみこませた油に火がついたものらしいが、なるほど、しりっぺたをもやしていたのだから、くまも、よりつかなかったわけではないか。——ただ、この間二十分か三十分のことが、自分には実に実に長いことに思われてならない。

くまは、わけなく生捕られた。始発駅で、さけのつみこみを終って、戸をしめるすきにはいりこんだものだろうが、なにしろひとりで汽車へ乗りこんだくまもめずらしいというので、駅員たちがだいじに飼っていたが、二年あまりで死んでしまった。

（昭2・3～4）

青空文庫情報

底本：「赤い鳥代表作集　2」小峰書店
　　1958（昭和33）年11月15日第1刷
　　1982（昭和57）年2月15日第21刷
初出：「赤い鳥」赤い鳥社
　　1927（昭和2）年3～4月号
入力：林　幸雄
校正：川山隆
2008年4月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

くまと車掌

木内高音

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/